

不思議なことにイザヤ書とエレミヤ書には、127ページという同じ分量の頁数が割かれています。長大、大部の預言書であり、全体を把握して読むことはなかなか大変なことです。幸いなことに、エレミヤにはバルクという書記がいました。エレミヤはネリヤの子バルクを呼び寄せた。バルクはエレミヤの口述に従って、主が語られた言葉をすべて巻物に書き記した。(36:4)

バルクはエレミヤの預言を「主が語られた言葉」として、巻物に記しました。敬虔な信仰者であり、エレミヤを尊敬し、エレミヤの活動の背景をも記していますので、書記として十分な働きができたと言えます。バルクは身分が高かったため、バビロンに捕囚として捕らわれて行きましたが、旧約聖書続編のバルク書から察するに、バビロンで民の信仰の指導者として十分に働いたと思われます。

とはいえ、エレミヤ書は、読みやすいとは言えません。けれども 1 章にエレミヤの召命の素晴らしい記事があります。「召命」ということの重大さを考えさせられます。



主はエレミヤに「生まれる前に聖別し、諸国民の預言者として立てた」と呼びかけます。エレミヤは わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。(1:6) と躊躇します。エレミヤは神の言葉に従いたいという信仰は強く持っていたでしょうが、イスラエルの民だけではなく、諸国民へも語る預言者に選んだといわれるのですから、途方もない任務でしょう。

しかし主は 彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す(1:8) と励まし、手を伸ばしてエレミヤの口に触れて、言われました。見よ、わたしはあなたの口に／わたしの言葉を授ける。見よ、今日、あなたに／諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し／あるいは建て、植えるために。(1:9) 国々の興亡を告げる言葉をエレミヤの口に授けるといいます。

その時はユダの王ヨシヤの治世 13 年のことであったと記されています。8 歳で即位したヨシヤ王は 21 歳になっていました。エレミヤは若者だと言っていますから十代後半と思われます。同胞である北イスラエルのアッシリアによる滅亡を見、そのアッシリアを滅亡させたバビロンの勢力がユダ王国に押し寄せている最中、諸国の存亡はすべての人々の最大の関心事であったでしょう。



エレミヤも若いヨシヤ王に期待を寄せつつ、自国が立っていける道を考えていたでしょう。エレミヤの心からの願いと、自国を取り巻く難題の中で、エレミヤはこれからの人生を神の召しに委ねる決断を迫られます。語るべき言葉を知らないということは、能力がない、若者であるということは人望、信頼が得られないということの意味するでしょう。即ち「私は0であり、－である」という正直な自己認識ではないでしょうか。神はエレミヤに、神の言葉をエレミヤの口に授けると約束されました。そして、エレミヤの目に見えているものが、神の目に見えているものへと示されていく、訓練のような過程が記されています。エレミヤは神に問われ、答えながら、神の言葉を示されていくのです。

使徒パウロが2度も 誇る者は主を誇れ(I コリ1:31、II コリ 10:17) と言っているのは、主はこう言われる。知恵ある者は、その知恵を誇るな。力ある者は、その力を誇るな。富ある者は、その富を誇るな。むしろ、誇る者は、この事を誇るがよい。目覚めてわたしを知ることを。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事／その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる。(9:22) という、初々しいエレミヤの、自分を無にして、神の力に信頼する、この召命の時に示された信仰に導かれているのでしょうか。